

パーミアン石窟と弥勒信仰

小 谷 仲 男

I はじめに

京都大学イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査隊を率いた水野清一は調査の初年度（1959年）にはじめてアフガニスタンのパーミアン石窟寺院を訪れ、磨崖に開削された二大石仏を見て、次のような印象を記している。

このパーミヤンにおける東西の大仏像は、衣文のちがいをみるとはいえ、その四角の顔、肩のはった体格はきわめてちかい。けっしてガンダーラ彫刻の盛期にさかのぼるものでなく、雲岡石窟の初期にくだるものでもない。そういうことから自然に西暦300-400年ということが推定される。2世紀、3世紀というのは古すぎるとおもう。けれども、これを証明することは、たいへんむつかしい。……フーシェ博士のはじめたアフガニスタン考古調査は、30年をはるかにこえ、続々と新しい成果をあげている点では敬服に価するが、パーミヤン石窟に関するかぎりでは、まだまだ調査のいたらぬところがある（水野清一 1961：760）。

水野清一はこの調査隊を発足させる以前、1938-1944年間に中国山西省大同にある雲岡石窟の組織的調査を実施した。この調査は1945年の敗戦によって打切りとなったが、主要な北魏石窟の写真撮影、測量を終えていたので、戦後、その資料を基に大部な報告書『雲岡石窟』16巻32冊（京都大学人文科学研究所 1951-1956）を刊行した。雲岡石窟の測量によって培った水野清一の中国仏像の鑑識力は抜群のものであった。それを背景にしたパーミアン大仏の印象記は、それゆえ私たちに示唆に富むものである。

雲岡石窟調査の後、水野清一は中国の仏教美術の源流をたずねて、アフガニスタン、パキスタンに調査活動を拡大した。1959年の予備調査に引き続き、1960年から1967年まで、ほぼ毎年アフガニスタン、パキスタンで約3カ月ずつ、測量調査、発掘を続けた。私も1960年度から調査隊に加わった。アフガニスタン北部の調査地へ向かう途中、パーミアン石窟に二度ほど立ち寄ったことがある（1960、62年）。大仏の頭上のにり、天井壁画を撮影するのに夢中になったことを思い出す。大仏の頭上は相撲の土俵くらい大きさがあったと記憶する。

2、3人が命綱もなしに動き回った。東の大仏が高さ35m、西の大仏が53mあり、頭上は柵もなく、よく無事であったと思う。

1969年から1977年にかけてR. Senguptaの率いるインド隊がユネスコの協力を得て、パーミアン壁画の修理、保存に当たった¹⁾。その間、二大石仏には大規模な足場が組まれた。そのさい、大仏の足元の堆積を除去したので、大仏の身長はそれぞれ、東大仏38m、西大仏55mに伸びた。しかし今も呼び慣れた35m大仏、53m大仏を使用する人もあるが、愛称と考えれば、さしつかえない。

水野清一は1967年3月に京都大学を退官し(1971年病没)、樋口隆康教授が調査隊を引き継いだ。樋口調査隊は1974、1976、1978年の三度にわたってパーミアンの全石窟に対する測量、写真撮影をおこなった。名古屋大学教授宮治昭も1964、1969年度の同大学の調査成果を踏まえて樋口隊に参加した。宮治昭は美術史の立場からパーミアン石窟の研究に最も熱心に取り組み、これまでにパーミアンに関する多くの論考を発表している。

周知のとおり、アフガニスタンは1979年以来内戦状態が続き、一切の学術調査活動は中断している。変化の発端は1973年にアフガン王制が崩壊し、共和国が成立したことに始まる。ついで、1978年に共産党政権の民主共和国が誕生する。しかし弱体であり、1979年、ついに旧ソ連邦は10万人の軍隊をアフガニスタンに投入し、共産党政権を支援しようとした。それと同時にアフガニスタン国内では反ソ連軍、反政府軍の部族ゲリラが組織され、激しい抵抗がはじまった。自由主義陣営の諸国もゲリラを支援した。その後10年の間、ソ連邦は予期した効果をあげることができず、1989年2月、すべてのアフガニスタン駐留軍隊を撤退させた。そして1991年、ソ連邦自身も崩壊の道をたどり(八月革命)、翌年、アフガニスタンのナジブラ共産党政権も崩壊した。

それでアフガニスタンに平和が訪れたかという点、それまで共同して戦っていたゲリラ同士が、お互いに主導権争いをはじめた。それが国内の宗教、民族の対立に発展した。しかしなによりも問題を複雑にしているのは、アフガニスタンに利害関係をもつ外国勢力の新たな介入である。それが問題の解決を長引かせ、戦闘をより激化させている。内戦の最中にパーミアン大仏が2度にわたって壁画もとともに爆破されてしまったことは記憶に新しい(1998年11月、及び2001年3月)²⁾。

アフガニスタンの内戦が始まるまでの1970年代には多くの人々がパーミアン遺跡を訪れることができた。パーミアンには小型飛行機の発着できる飛行場も完成した。その間のパーミアン石窟の調査研究は、先に挙げた京都大学、名古屋大学の調査のほか、アフガニスタン考古局長のZ. TarziやDeborah Klimburg-Salter女史の現地調査を踏まえた研究がある。二人ともパーミアン石窟を研究テーマに博士論文を作成し、それぞれストラスブルグ大学とハーバード大学に提出し、学位を得た。以上のような研究にもかかわらず、パーミアン石窟、

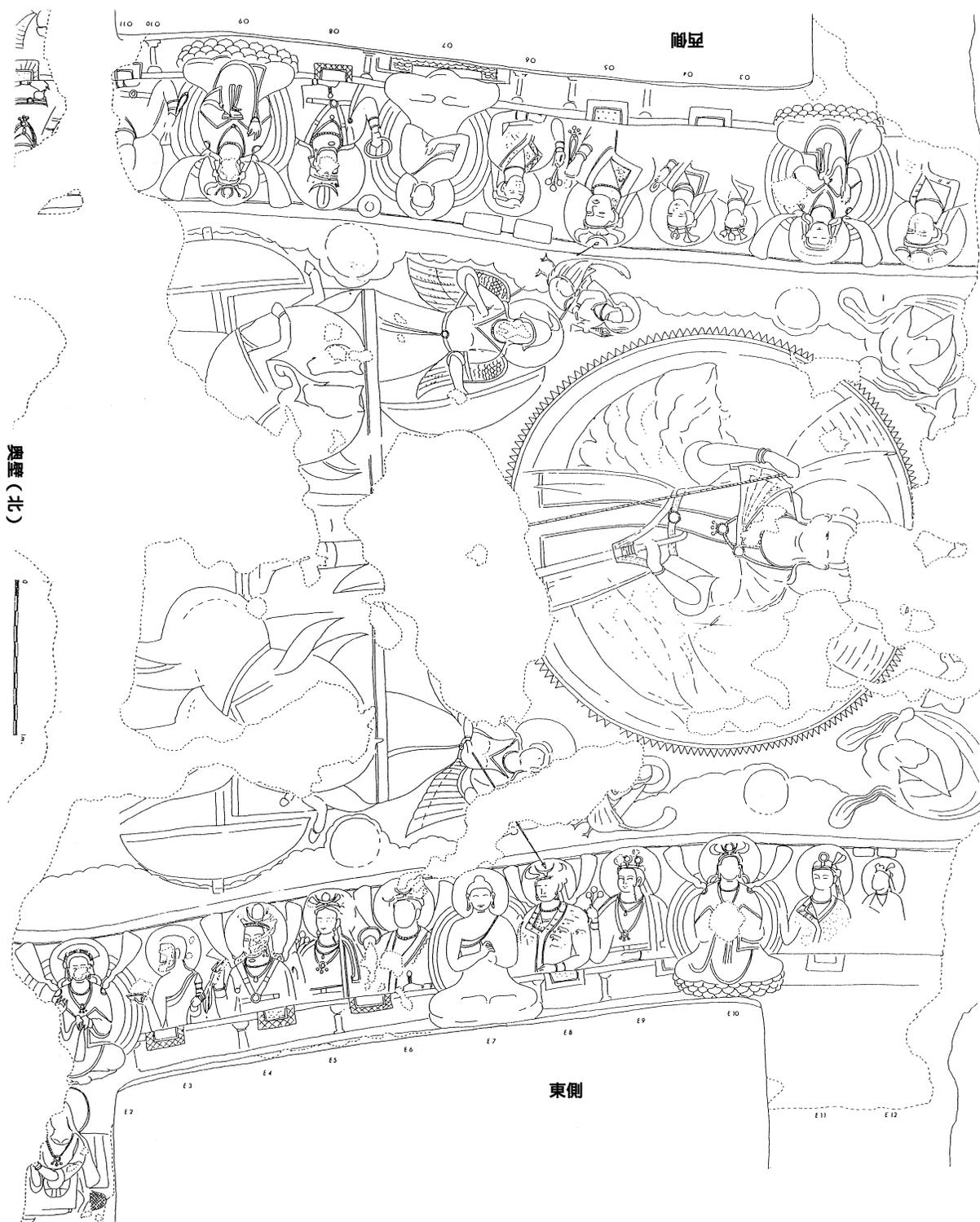
大仏がいつ、誰によって開削されたかの問題は十分に解明されていない。多くのなぞを残したまま、世界的文化遺産が戦争の犠牲となり、人為的に破壊されてしまったことは痛恨のきわみである。せめて残された調査資料によってパーミアン石窟、大仏そして壁画の歴史の意味を明らかにし、失われた価値を再認識してみたいと思う。

II 38m 大仏天井壁画の礼仏行列図

Z. Tarzi 博士は *L'architecture et le décor rupestre des grottes de Bāmiyān* (パーミアン石窟の建築と装飾意匠) Paris 1977 年、のなかで二大石仏の造立年代を 7 世紀初と推定した。その手がかりとしたのは 38 m 大仏龕の天井に描かれた俗人供養者の行列図であった。Tarzi 博士はこの 38 m 大仏天井壁画全体を綿密に描きおこして、報告書につけ加えた (Tarzi, Z. 1977: 付図 A 1)。私たちが Tarzi 博士の図面と手元にある写真を見比べながら検討を加えてみたい (挿図 1)。

まず 38 m 大仏の頭上の天井中央には、二輪戦車で天空を駆ける人物像が大きく描かれている。人物の背後には直径約 3 m の円盤が青地をバックに白く描かれ、周縁には光の放射を示す細かな鋸歯文がつく。白色の円盤は太陽を意味し、人物は太陽あるいは光明を擬人化した男性神である。神は右手に槍を持ち、左手は腰のベルトから吊り下げた長剣の柄を握って立つ。上衣は丈の長い丸首、縁飾りのついたチュニック、袖は肘のところでフレア (折り返し) になる。マントをはおり、胸元のブローチで両端を留め、裾は太陽円盤の下方にそって大きく翻る。ズボン、ブーツを履く姿と思えるが、その部分の壁画は剥落している。太陽神は頭の後に円い光背をつけ、両肩からリボンを翻す。その衣裳とともにイラン的な表現であり、ゾロアストラ教の太陽神ミスラ Mithra を描いたと思われる。御者 (剥落) と並んで戦車の両端には有翼で頭光をもつミスラの従者 (神) が描かれる。右手の神はヘルメットをつけ、手に槍と楯を持つ。左手の神は両手で槍を構え、ともに行く手に立ちはだかる邪悪を追い払おうとしている。車を牽引するのは四頭の有翼の白馬で、前脚を高く蹴り挙げて疾走する。太陽神と馬車を浮き出させる青地バックの外側には朱色の帯があり、夜明けと暗やみとの境を示す。その境界にはシヨールに風をはらませ、飛翔する神がいる。風神のようであるが、夜を象徴する神であることは、田辺勝美教授によって論証された (田辺勝美 1999: 122 - 139)。奥壁に近く、松明を手にもった鳥人が描かれる。ペルセポリス浮彫において、玉座に坐るペルシア王ダリウスの頭上に光明の神アフラ・マズダが描かれるが、鳥人の姿である。このミスラ神の性格については機会を改めて論じてみたい。

さて、この太陽神の両外側には俗人供養者の行列が描かれている。右 (東) 側には 9 人の人物が一人の僧侶に導かれてブツダの礼拝に向かう。その間に三体のブツダ坐像が挿入される。



【本図出拠】

Zemeryalai Tarzi,
*L'architecture et le décor
 rupestre des grottes de
 Bāmiyān (パーミアン石窟
 の建築と装飾意匠)* Paris 1977.
 付図A1より

【構図説明】

中央頂上：二輪馬車で天駆ける
 太陽神（ミスラ）
 左右側壁：礼仏図
 （東列人物： E1 - E12）
 （西列人物： O1 - O11）

ブツガ坐像：E7、O7

飾られた仏：E2、10、O2、9

比丘：E3

王室一族：E4、6、8、9、11、12

：O1、3、6、8、10、11

挿図1 38 m 大仏天井壁画図

パーミアン石窟と弥勒信仰



挿図2 パーミアン壁画の王冠形式 (Tarzi, Z. 1977: pl. 151 による)
1 E 4, 2 O 4, 3 E 5, 4 O 9 (以上 38 m 大仏壁画), 5 飾られたブツダ (55 m 大仏壁画)

行列の先頭はササン朝ペルシア風の王冠をつける男性であり、国王と思われる。以下はそれに随行する家族と見られる。左(西)側にも三体のブツダ坐像をはさんで、やはり王室の家族らしい8人の行列が描かれる。

まず東側の人物から詳しく見ていくと、比丘(E 3)に続く王冠をつけた男性(E 4)は、筒袖丸首の上衣を着け、両肩から胸にかけて交差する胸帯を締めている。下半身は手前のバルコニーで隠されて見えない。両肩からリボンを翻すなど、ササン朝ペルシアの皇帝衣裳を模倣している。王冠形式は三面に凸壁をかたどり、その上に三日月と球形を載せる(挿図2-1)。

三日月を王冠の装飾要素とするのは、ササン朝皇帝の Yazdagard ヤズデグルド1世(399 - 420 A.D.)に始まる。同じ王冠、同じ服装の人物は西側(O 8)にも見られ、同一人物であろうか。国王の次に来る人物(E 5)は王妃と思われる。王冠(頭飾り)をつけ、両頬に巻き毛を垂らす(英語の表現 kiss curl)。胸には二本のペンダントをつける。服装は丸首筒袖の上衣であり、両肩にガウンをはおる。王冠は左右に翻る小さなリボンとその上に三日月、球形を載せるもので(挿図2-3) ササン朝の王冠よりも、後に述べるキダーラ・クシャン王朝の金貨、銀貨の王冠に類似する。次の人物(E 6)は腰の剣柄に左手を置く男性である。小さな三日月を三面に並べた冠をつけ、筒袖の上衣は丸首でなく襟がつき、左襟が折り返しになっている。同じ王冠、上衣の人物は西側(O 1)にも見られる。

ブツダ (E 7) をはさんで次の人物 (E 8) も王冠をかむり、上衣は筒袖であるが、丸首ではなく、縁取りのある折り襟である。Tarzi 博士自身の観察では上衣の上に動物の群れが描かれていたという。しかし写真では確かめられない。王冠は左右にひろがる鳥翼とその上に三日月をのせる形式である (挿図 2 - 2)。鳥翼はササン皇帝バフラーム 4 世 (388 - 399 A.D.) の王冠に見られるが、三日月はない。キダーラ・クシャン朝の銀貨では、鳥翼、三日月、球形の王冠が見られる。次には王冠をかむった、いわゆる「飾られたブツダ *Bouddha paré*」の坐像 (E 10) が来る³⁾。つづいてさきの国王夫妻の子供と思える二人 (E 11、E 12) が描かれる。同じ王冠、服装の国王と二人の子供は西側の人物 (O 5、O 4、O 3) に見られる。以上、東側の人物について観察してきたが、西側の人物も途中で言及したように、ほぼ同様な衣裳で礼仏に参列する王室一族である。

礼仏に参列した男性像には二種あるいは三種類の王冠が観察された。つまり城壁冠に三日月と球形がつくもの (E 4、O 8)、鳥翼と三日月 (E 8、O 5) のつくものである。少なくともこの二人の国王が描かれていたと思われる。三面三日月 (E 6、O 1) の王冠をつける人物は随行者がいないので、第三の国王と見てよいかどうかわからない。以上の礼仏行列像中の国王は、その描かれている位置から考えて 38 m 大仏造立の発願者であった可能性が大きい。もしそうだとすれば、その国王たちとはいったい誰であろうか。

すでに言及したように、国王たちの衣裳、王冠はササン朝ペルシアの皇帝のそれに類似はしているが、かれらはササン皇帝そのものではない。王冠の比較検討からすると、クシャン王朝を再興したキダーラ・クシャン王がその中に描かれている可能性が高い。ではキダーラ・クシャンとはいつの時代で、どのような王朝であったか。

III キダーラ・クシャン王朝とパーミアーン石窟

キダーラ・クシャン王朝は歴史上にあまり知られていない。またその性格を知る手がかりも少ない。キダーラ王とその後継者諸王たちが発行した貨幣が知られていること、中国の歴史書『魏書』西域伝の大月氏・小月氏国の条に簡潔な記録があるのみである。まず、『魏書(北史)』西域伝の文章を読むことから始めてみよう。

大月氏国は盧監氏城に首都を置く。弗敵沙 (バダフシャン Badakhshan) の西方に位置し、[北魏の] 代都から 14 500 里の距離にある。北は蠕蠕と境界を接し、しばしば侵攻をこうむったため、ついに西徙して薄羅城 (バルフ Balkh) を首都とした。そこは弗敵沙から 2 100 里の距離にある。その国王の寄多羅 (キダーラ Kidara) は勇敢で戦争にたけ、ついに軍隊を出動させて大山 (ヒンドゥクシュ山脈) を越え、南のかた北インドを征服した。ガンダーラ以

北の五国はことごとく服属した。北魏世祖(424 - 451)の時代に、その国の商人が交易のために[北魏の]首都にやってきた。かれらは自ら言う。「石を熔解して五色のガラス器を製造することができる」と。(下略)

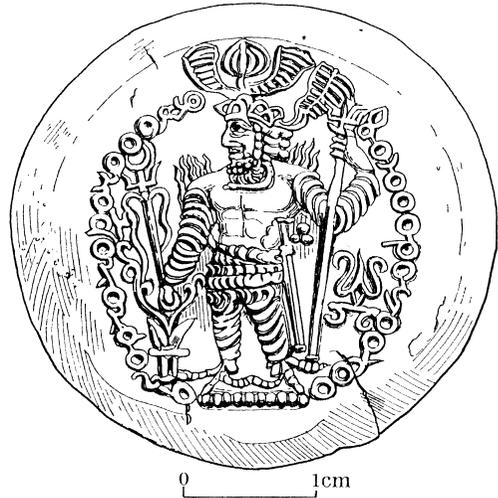
小月氏国は富樓沙城(Purushapura 現ペシャーワル)を首都とする。その国王は元来、大月氏王、寄多羅(キダーラ)の子であった。寄多羅が匈奴[蠕蠕]に圧迫されて西徙した時、自分の子を派遣し、ここを都城として統治させた。それゆえ小月氏と称する。(下略)

以上の中国側の記録は、西暦437年に西域使者として北魏朝廷からこの地方に派遣された董琬がもたらした情報にもとづくと思われる(松田寿男 1986: 297)。同じ頃、西域諸国の商人らが北魏の首都、平城(山西省大同)を訪れ、一時衰退していた中国と西域との交流が活発になってきたことも上の文章からうかがえる。

董琬の旅行以前のこと、現在のアフガニスタン東北のバダフシャンを中心にキダーラ(寄多羅)という人物がかつてのクシャン王朝、つまり月氏の再興をめざして勢力を拡大したことが記述されている。それは『魏書』西域伝が大月氏国に先立って、かつての大月氏五翕侯の跡地を記述していることとも関係がある。大月氏国クシャン王朝は西暦2-3世紀にかけて、インド、ローマ、中国をつなぐシルクロード貿易の仲介者として、最盛期を享受したが、241年頃、新興のササン朝ペルシアの攻撃を受けて滅亡した。現在のアフガニスタンからインド西北部にかけてのクシャン王朝旧領土は、以後ササン朝ペルシアの皇族らによって統治されることになる。かれらは本国の宗主権を認め、クシャン王(Kushan-shah)を称し、独自の貨幣を発行するとともに、土着の伝統文化をも尊重した。しかし次第にヒンドゥクシュ山脈を境に、北側はササン朝ペルシアの、南側はインド・グプタ朝文化の影響をつよく受けるようになり、分裂の様相を呈した。その代表的な実例は両地域で流通した貨幣である。南側ガンダーラ地方の貨幣はブラーフミー文字を刻み、北側の貨幣はパフレヴィー文字を刻む。貨幣の図柄も同様であった。北側で発行されるササン式貨幣を特にクシャノ・ササン貨幣(Kushano-Sasan Coin)と呼んでいる。しかし地域差が生じたにもかかわらず、金貨と銅貨だけを発行するというクシャン通貨の制度は継承された。ローマのアウレウス金貨に基準をとって始まったクシャン金貨一枚7.9gの重量は、金質を劣化させながらも、キダーラ・クシャン王朝に至るまで維持された。同時にこの金貨の重量基準はグプタ金貨にも採用された。それはかつてのクシャン王朝の経済文化的影響の大きさを物語って、興味深い。金貨はキダーラ・クシャン朝を最後に廃止され、ササン朝ペルシアと同じ銀貨、銅貨の通貨制度に移行した。金貨はビザンティン帝国、インドのグプタ王朝、エチオピア・アクスム王朝で引き続き発行された。

キダーラ・クシャン朝が勃興した頃の世界情勢は、かつて大月氏国クシャン王朝が最盛期を

迎えた時期といくぶん類似する状況になってきた。長らく分裂状態にあった中国北部が北魏によって統一され、北方草原の遊牧世界では蠕蠕（柔然）がかつての匈奴に代り、ローマ帝国は東ローマ（ビザンティン）に重心を移し、パルティアはササン朝ペルシア帝国にとってかわられた。おそらくこのような状況下にキダーラ（寄多羅）王はクシャン王朝の復興を夢見て、大月氏五翕侯の故地、アフガニスタン東部のバダフシャン地方から勃興したと思われる。ササン朝ペルシアからの独立、そしてヒンドゥクシュ山脈



挿図3 キダーラ・クシャン王金貨
(Durman Tepe 出土, d 3.65 cm, 7.82 g)

を越えての勢力拡大は、かつての大月氏貴霜翕侯のクジュラ・カドフィセス（丘就卻）王の活動を彷彿とさせる。北魏西域伝の編者も『後漢書』西域伝に引きずられた記述を加えているので、注意を要する。では中国史書に記録する寄多羅（キダーラ）王の勃興は正確にいつの時期であろうか。キダーラ王朝の貨幣からその問題を考えてみたい。

私はキダーラ王朝の勃興、キダーラ王貨幣の年代について、ドゥルマン・テペの発掘報告書のなかで論じたことがある（水野清一編 1968 : 49 - 57）⁴⁾。私たちがアフガニスタンの北部、クンドゥズの西郊のドゥルマン・テペを発掘した時（1964年）、小壺一杯に貯蔵された貨幣を発見した。クシャノ・ササン（キダーラ）金貨1枚（挿図3）と鑄付いて一塊となった同王の小銅貨多数であった。金貨は表面の文字銘、図柄はユニークであり、また裏面は打刻されていなかった。他に例がないものであった。いちばん近い例は、1933年、カーブル東郊のテペ・マランジャンの仏教寺院址から発見された12枚のクシャノ・ササン金貨のうち、第二種の11枚であった（Curiel, R. 1953 : pl XIII - pl XVI）。そこに見られる王冠装飾は共通してリボン二本と球形から構成されるものであった。テペ・マランジャンの12枚の金貨は、そのほかササン朝銀貨373枚とともに小箱に入って発見された。ササン銀貨の内訳は、シャープール2世（309 - 379 A.D.）338枚、アルデシル2世（379 - 383 A.D.）24枚、シャープール3世（383 - 388 A.D.）11枚であった。したがって12枚の金貨の年代もササン皇帝と同時代、とくに最後のシャープール3世の治世にちかいと思われる。

私はさらにリボンと球形の王冠が正面向きキダーラ王の銀貨にも見られることに気づいた（挿図4-1）。その銀貨にはブラーフミー文字で *Kidara Kusana sa*（クシャン王キダーラ）と記されている。したがって私はドゥルマン・テペの金貨、およびテペ・マランジャンの11枚

の金貨もキダーラ王の発行と判断した。発行年代については、裏面に描かれる拝火壇の表現をササン銀貨のそれと比較することによって、380年頃の打刻という結論を得た。バーミアンに見られる王冠には三日月が加わるので、同じく三日月を王冠につけるササン皇帝ヤズデゲルド1世(399 - 420 A.D.)と同時代と見なければならぬ。その年代は400年頃と考えたい。

キダーラ・クシャン朝諸王の発行する貨幣は種々知られているが、以下にバーミアンの壁画人物の王冠と特に関わりの深いと思える貨幣の四種(表、裏)を取り上げて、紹介してみたい。

第一種(挿図4-1) キダーラ王銀貨(Göbl, R. 1967: pl. 11 - 11 - 7)

(表面) 上述したキダーラ王銀貨。正面向き王の胸像を描く。王冠は小枝飾りをめぐらせ、その上に球形と左右に翻るリボンのをのせる。両肩に大きな髪のかぶりがあり、外側に大きなリボンが翻る。耳飾り、連珠のネックレスを付ける。周縁右上にブラーフミー文字銘があり、*Kidara kusana sa* と記す。

(裏面) ササン銀貨と同形式に、中央に拝火壇を配置し、その両側に剣を捧げ持つ守衛を描く。炎の中に神像の上半身が表現される。周縁下方に *Sulakha* と記す。

第二種(挿図4-2) キダーラ王銀貨(Göbl, R. 1967: pl. 11 - 14 - 3; Martin, M. F. C. 1937: pl. 1 - 1)

(表面) 右向き王の胸像。王冠は凸壁形を三面にめぐらせた城壁冠のうえに、三日月と球形のをのせる。三日月と城壁冠の間からリボン(2本)が翻る。髪のかぶりが後に束ねられ、肩から大きなリボン(2本)が翻る。耳飾り、連珠のネックレスを付ける。周縁右側にブラーフミー文字で *Kidara Kusana sa* と記す。

(裏面) 第一種と同じ。周縁下方に *sa* の文字がある。

第三種(挿図4-3) ペローズ王銀貨(Göbl, R. 1967: pl. 12 - 15 - 1; Martin, M. F. C. 1937: pl. 4 - 47)

(表面) 正面向きの王の胸像。王冠は凸壁にかえて、葉形あるいは羽根の飾りをめぐらせ、そのうえに、三日月と球形のをのせる。髪のかぶりが顔の両側にあり、両肩から大きなリボンが翻る。連珠のネックレスと胸帯が見える。

(裏面) 第一種と同じであるが、右側の守衛にかえて丸形の花瓶が描かれる(バーミアン第164[C]窟の壁画の花瓶に類似)。周縁下方にパフレヴィー文字で *Piroz (pyrwc)* と記す。

第四種(挿図4-4) ブッダバラ王銀貨(Göbl, R. 1967: pl. 12 - 18 - 3; Martin, M. F. C.)

1937 : pl 4 - 51)

(表面) 正面向き王の胸像。王冠は左右に翼を翻し、中央に羽根飾りを立てる。そのうえにリボンを左右に翻し、うえに三日月と球形をのせる。連珠ネックレス、肩リボンは上述の貨幣と同じ。

(裏面) 拝火壇と両側守衛は上述貨幣と同じであるが、全体に粗雑となる。周縁下方にブラーフミー文字で *Buddhabala* と記す。

以上のうち、とりわけ第一種の王冠はパーミアン礼仏行列中の E 4、及び O 8 の人物王冠と同一である。貨幣の国王にはあご髭がなく、パーミアン壁画人物には濃いあご髭が描かれているなど異なるところもあるが、同一時代の、同一王とみなすことが可能であろう。その他のパーミアン王冠の要素も、うえに示したキダーラ諸王の貨幣から容易に導きだすことができる。Z. Tarzi 博士も一応同じ結論に到達した。しかし博士はもう一種の王冠、三面に三日月を配する形式が気懸りであった。それは 55 m 大仏の天井壁画に描かれた「飾られたブツダ」(挿図 2 - 5) にも見られた。三日月の中にオリブの実形を立てる、やや複雑な三

面三日月宝冠である。三面に三日月形のつく宝冠はパーミアン K 窟 (No 330) の弥勒菩薩像、同じくパーミアン峡谷のカクラク石窟の、いわゆる「狩獵王」の宝冠にも見られ、パーミアン独自の意匠と考えられる。Tarzi 博士は貨幣の中に類似の王冠を探そうとし、インド・エフタル王のナラナ・ナレンドラ Narana - Narendra の貨幣に三面三日月にオリブ実形を直立させた王冠を認めた (Göbl, R. 1967 : Vol III, pl 33 - 138, pl 34 - 147 ~ 150)。Tarzi 博士はパーミアン壁画の王冠をキダーラ・クシャン王冠に同定することを放棄し、より新しいインド・エフタル系貨幣の王冠に同定しようとした。ゲブル R. Göbl の研究によると、この王は麤仏で悪名高いミヒラクラ Mihirakula (『大唐西域記』第 4 巻、磻迦国) の後継者の一



挿図 4 キダーラ・クシャン王の銀貨
(Göbl, R. 1967 による)

人で、580年頃に西北インドからアフガニスタン南部を支配した王という(Göbl, R 1967: Vol. II, 70-71)。Tarzi 博士はパーミアン大仏の壁画と大仏の造立とは同時期と考えられ、それらの製作時期はナレンドラ王の580年をさかのぼることはなく、また玄奘の巡礼より以前であることは確実であるので、二大石仏およびその天井壁画のは7世紀初の製作であると結論した(Tarzi, Z. 1977: 124)。

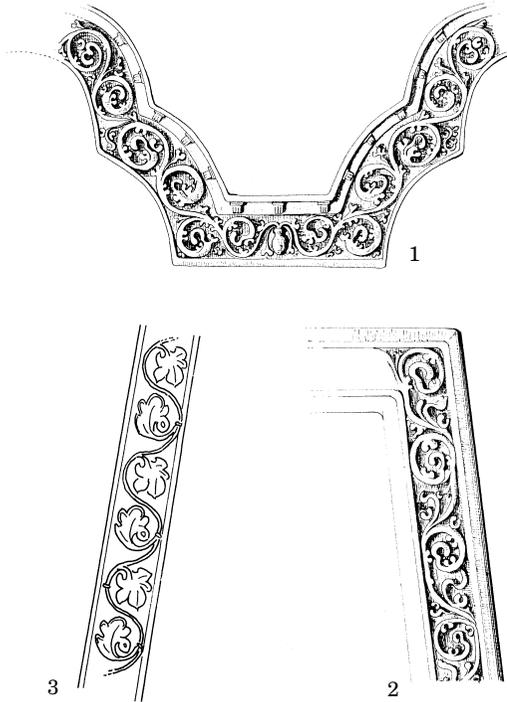
しかしインド・エフタル諸王の貨幣王冠からは、三面三日月以外にパーミアン壁画の王冠要素を説明することはむずかしい。またインド・エフタルがパーミアンの支配に直接関わったことを証明する史料もない。それでも Tarzi 博士が7世紀にこだわったのは、パーミアン石窟の年代を決定する手がかりに、もうひとつの重要な材料が存在したからであった。それは石窟の仏龕の周縁などを飾る塑造唐草文であり、それが6-7世紀という比較的遅い年代を暗示した。Tarzi 博士がこの唐草文の比較研究によって提案したパーミアン石窟年代論のほうが、王冠形式のそれより説得力があり、多くの研究者の支持を集めたように思われる。私たちも次にパーミアンの唐草文の問題を考えてみたい。

IV パーミアン石窟の唐草文装飾

Tarzi 博士は石窟構造によるパーミアン遺跡の編年はむずかしいと考え、装飾意匠、特に残存例の豊富な唐草文を手がかりに石窟の年代を割り出すことを試みた。まず、55m大仏の足下に開削された石窟群をとりあげる。大仏の両足を取り囲むようにして大小10個の石窟が並び、内部平面が円形、方形あるいは八角形で、天井はドームかラテルネンデッケ(三角隅持送り式)という丁寧な仕上げである。側壁には仏龕がほられており、塑造仏像が安置され、礼拝、儀式用の石窟であったと思われる。しかし仏像はすでに失われていた。

石窟内部の装飾は周壁の上方胴部から天井部分にまで及ぶ。壁面の装飾は壁画と塑造の二種が使用されたが、55m大仏の足下石窟に最近にまで残存したのは塑造による複雑な装飾であった。スキッチアーチ、梁、壁柱、列龕帯といった建築意匠と、それに付けられる唐草文装飾が圧倒的であった。唐草文は列龕の縁取りや列龕帯を上下に区切る突帯に施された。唐草文には大小あるが、そのスタイルはみなほぼ同じである。主茎が横S字形に連続し、S字形の内側に主茎から枝茎が出て、自ら肥瘦しながら反転渦巻する。節目にごとに小さな勾玉形の双葉がつく(挿図5-12)。枝茎はもともとパルメットあるいはブドウの葉形から変化し、発展してきたものと思えるが、このように図案化されては、もとの具象的姿が何であったか想像することはできない。

Tarzi 博士はこの唐草文の源流をインド美術に求めた。アジャンタ石窟の第2窟にはパーミアンに類似したスタイルの渦巻形唐草文が、天井壁画や列柱の浮彫装飾としてふんだんに使



挿図5 パーミアン石窟の唐草文様

1 I窟(626), 2 D窟(167), 3 55m大仏(620)
(1, 2 Tarzi 1977 : pl.140, 3 小谷作図)

用されている(高田修 1971 : pls. 105, 121, 125)。アジャンタ第2窟は西暦500年頃に開削され、グプタ後期に属する。グプタ後期の美術は豪華な装飾が特色である。アジャンタ以外でも、仏教美術の中心地のグプタ期マトゥラーでは細身で優美な仏像が彫刻され、仏像の光背には複雑華麗な唐草文が施された。グプタ美術の影響はインドからアフガニスタンへ及んだ。パーミアンの反転渦巻唐草に最も類似する例は、同じアフガニスタンのフォンドキスタン仏教寺院から見つかっている。フォンドキスタンはカーブルからパーミアンへむかう途中のゴルバンド峡谷にあり、カーブルの西128km、パーミアンの東117kmに位置する。仏塔を中心に安置した内庭とその四面に仏龕(A~J)を配した小規模な寺院で、仏龕には彩色の施された粘土像が原位

置に多く残されていた。素材が粘土のせい、その可塑性を生かし、インド的三屈法を用いた優美な姿であった(Hackin, J., Carl, J. et Meunie, J. 1959 : 49 - 58)。

問題の唐草文は仏龕入口のアーチ縁取りに塑造で施される。一例をあげると、仏龕Eには俗人夫婦の坐像が安置され、その仏龕入口アーチの縁取りに唐草文が施されている(挿図6)。パーミアンの唐草文より主茎、枝茎がさらに流暢に展開する傾向を示す。壁柱と入口の壁面には水瓶を持った弥勒菩薩が描かれる。誇張した三屈法により、官能的美しさを伝える。時代はポスト・グプタであろう。この遺跡には他に年代を推定する手がかりが見つかった。仏龕Eの夫婦坐像の基壇下から骨壺が発見され、中から灰に交じって貨幣が見つかった。アラブ・ササン銀貨2枚と土着のナスブク・シャー銅貨数枚である。ともに7世紀末のものと判明した(Göbl, R. 1967 : Vol II, 313 - 4)。

以上のような唐草文の比較研究に先の王冠の比較研究を総合して、Tarzi博士はパーミアンの大仏及びその天井壁画が7世紀初の作であるという判断を下した。確かに塑造唐草文を見るかぎり、はじめTarzi博士、その後に宮治昭教授によって詳細に検討されたように、その年代は早く見つっても6世紀前半をさかのぼらない(宮治昭 1983 : 587)。しかし私は55m大仏の天井壁画中にもっと古い様式の唐草文があることに気づいた。大仏足下の石窟では

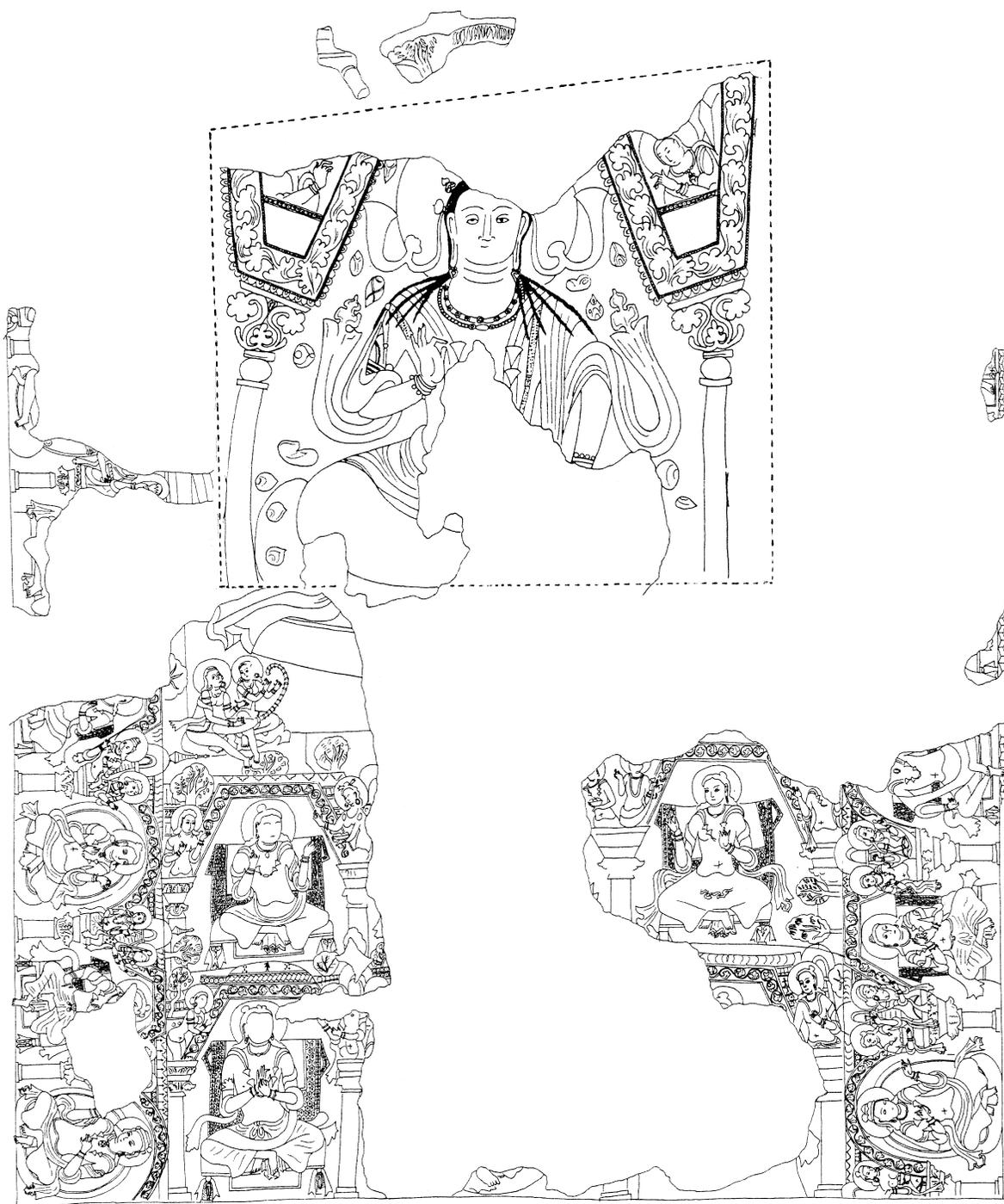


挿図6 フォンドキスタンの仏龕と唐草文 (MDAFA VIII. Fondukistan, Niche E, Fig .189 による)

補修があり得る。しかし天井壁画と大仏は同時に作製され、その後の補修は困難である。現存の(2001年3月消滅)天井壁画は大仏建立と同一時期のものである。その壁画唐草文こそは大仏造立の年代を決定する。

次に55 m 大仏の天井壁画を検討してみよう。Tarzi 博士は55 m 大仏の天井壁画について先の38 m 大仏壁画とちがって部分的にしか描きおこしていない(Tarzi, Z 1977: 付図A3)。名古屋大学調査隊の宮治昭教授が描きおこした図のほうが壁画全体を収めており、有用である(小寺武久他 1971: pl 95)。今、その労作を借用し、手元の写真とあわせて壁画唐草文について検討してみたい(挿図7)。

55 m 大仏壁画の構成は、残念ながら中央部分が大きく剥落しているのでわかりにくい。後述するように、私はそこに大きな弥勒菩薩坐像が描かれていたと推定する。今、試みに坐仏仏龕 E (No 223) 天井に描かれた弥勒菩薩像をそこに挿入してみた(挿図7、点線部分)。いくぶん製作年代が異なるので、ぴったりとはいかないが、もとの壁画構成はほぼそのようであったと想像できる。まず、55 m 大仏の天井壁画について考えてみると、奥壁にそって楯形龕でおおわれた菩薩坐像三体が並んでいた(足を奥壁に向けて)。保存の良いのは左(東)側のみで、他は剥落。その直上にも同様な三体の列龕が並ぶ。そのうちの中央菩薩龕形が剥落する。左側菩薩龕の上方には、二人の天女が一つのハーブを共同で演奏する姿がある。位置から見て、中央の弥勒菩薩(復元)を讃え、演奏しているかのようなのである。しなやかな姿態はアジャンタ壁画を思わせる。上述の菩薩坐像を含め、55 m 大仏壁画全体がグプタ朝美術の強い影響のも



挿図7 55 m 大仏天井壁画図とE 窟天井菩薩像図
 (名古屋大学調査隊、小寺竹久他 1971 : pl 95 , pl 104 による)

とに製作されている。先に見た 38 m 大仏の壁画がササン朝ペルシアの影響が強かったのと対照的である。

以上の中心構図の外側には、やや小さな菩薩坐像の列龕帯が左右対称に描かれる。残存するのは奥壁に近い 3、4 体ずつであるが、もとは 8 体ずつ描かれていたと推定される。菩薩をおおう龕形は円拱形龕と楕拱形龕を交互に並べる。菩薩の姿は中心の菩薩と同様に交脚ぎみに足を垂らし、ゆったりした姿勢で、両手を広げたり、組み合わせたりして、弥勒菩薩を讃え、なにかを語り合っているかのようなようである。

さて問題の唐草文は菩薩坐像をおおうすべての龕の縁取り(枠)に見られる。龕形の枠内は茶褐色に塗られ、唐草文は白線で輪郭を付けられ、地色と同系色のやや明るい黄褐色で唐草文が描かれる。ただ現状では退色がはなはだしく、細部まであとづけることは、困難がともなう。(樋口隆康 1983: 第一巻、カラー図版 pl 99 - pl 104)。Tarzi 博士の描きおこし図では唐草文はあいまいにしか処理されていない(Tarzi 1977: 付図 A 3)。ここに載録させていただいた宮治昭教授の作図は、ある程度バルメット波状文あるいはブドウ葉唐草文であることを意識して描きおこされているが、そのスタイルを吟味するまでには至っていない。

私は西側(左)列龕帯のうち、奥壁から二番目の楕拱形龕の唐草二葉を、手持ちの写真から描きおこし、挿図 5-3 のように復元した。ブドウ葉形をつけた主茎が S 字形に展開する古典的唐草文である。Tarzi 博士が年代決定の手がかりとした塑造唐草文(挿図 5-1,2)と比較してみると、写実的というか、ナイーブというか、古典的表現というほかはない。両者のスタイルの差に驚かされる。残りの列龕帯に描かれる壁画唐草文も若干の差はあっても、ブドウの葉の全形か側面形(半バルメット)を茎でつないだ波状文である。それらはガンダーラ彫刻に施される代表的な唐草文であり、私たちが発掘調査したタレリ、ラーニガートの寺院址でも多くの例を見つけている⁵⁾。この唐草文に限れば、冒頭で紹介した水野清一のパーミアン大仏の造立年代、西暦 300 - 400 年という年代観は外れてはいない。さらにこの唐草文が雲岡石窟にも多用されていることに気づけば、パーミアン石窟の年代は一層興味ぶかい問題となる⁶⁾。

塑造唐草文と壁画唐草のスタイルの違いは、年代差ではなく、素材の差ではないかという疑問がでるかもしれない。しかし塑造唐草と同じ反転渦巻文を壁画に描いたものが、現にパーミアン石窟に存在する。それは N 窟 (No 471) である。N 窟は一辺 2.3 m の正方形平面の小部屋に三角隅持送り式天井を造り出すもので、その天井の梁側面に唐草文が描かれている。赤色地に唐草文の輪郭を描き、なかを白色に塗り、鮮やかでコントラストの強い壁画唐草文になっている(樋口隆康編 1983: pl 84-3)。色彩から判断して、パーミアン石窟のなかでは後期の開削であり、新しいスタイルの唐草文が採用されたと思われる。

以上考察したとおり、55 m 大仏足下の石窟群に施された塑造唐草文の年代で大仏の年代を推定するのは間違いである。塑造唐草文は後補の作品である。したがって石窟自体の開削は 55

m 大仏同様にもっと古いものである。開削当初の石窟は主として壁画で装飾されていた可能性がある。現存の塑造装飾はパーミアン仏教石窟の最後の段階を示すものであろう。

V パーミアンの弥勒菩薩像

弥勒菩薩はパーミアン石窟の坐仏仏龕の E 窟 (223)、H 窟 (404)、I 窟 (530)、それぞれの坐仏本尊の頭上、天井壁画に描かれる。そのほか K 窟 (330)、J 窟 (388)、カクラク石窟 (Kakrak 43 窟) の天井にも弥勒菩薩像が描かれている。今は亡き釈迦牟尼仏の偉大さを賛嘆しつつ、あわせて未来に出現するという弥勒仏を待ち望むという熱烈な信仰が反映されている。現在、弥勒 Maitreya は天上世界の兜率天 *tuṣita* において修行し、待機していると考えられ、その姿は装身具 (瓔珞) を着けた世俗的な菩薩 *Bodhisattva* の姿として表現される。釈迦牟尼がブツダとしてのさとりを得る以前、シャキヤ国の太子としての姿もまた世俗的姿の菩薩像として礼拝される。ガンダーラ美術の両菩薩像は一見区別がつかないほど類似している。しかし詳細に見ると、頭飾に差異があり、王族出身の釈迦を宝冠 (ターバン) 型菩薩、パラモンの家に生まれるという弥勒を束髪型菩薩として区別を意図している。さらに弥勒は釈迦仏を継承するという意味で、左手に水瓶を持たせるのが原則である。ガンダーラにおいて確立した弥勒菩薩の図像学は、パーミアン壁画にも継承されたと思える。E 窟の弥勒菩薩は (挿図 7) 破損が大きいため正確には判断できないが、宝冠といえるほどの頭飾りはない。束髪型弥勒像の図像形式が守られている。左手先も剥落して確認できないが、たぶん水瓶を掲げ持っていたはずである。水瓶は K 窟およびカクラク石窟の弥勒菩薩に明瞭に確認できる (樋口隆康編 1983 : pl 63, pl 140)。ただ、この二例の弥勒菩薩では頭飾が束髪型から宝冠型 (三面三日月) に変化していることが注目される。パーミアン石窟においてガンダーラ図像学が徐々に崩れていく過程が見て取れる。その背景にはブツダ・菩薩観の変化が考えられるが、パーミアンにおけるササン朝ペルシアの強い影響力、とくに装飾美術の流行が第一の要因であろう。パーミアン石窟以後の、西域キジル石窟や 460 年頃に開削される中国雲岡石窟の弥勒菩薩像はすべて宝冠菩薩となる。水瓶を持つことも必須でなくなる。そのかわり、中国では交脚菩薩像が弥勒の図像形式として定着する。パーミアン石窟は年代的にも、図像学的にもガンダーラ美術と中央アジア・中国との懸け橋であったといえる。

弥勒菩薩像はガンダーラにおいて釈迦の仏、菩薩像とならんで多数制作された。その三尊が当時の主たる礼拝像であった。また釈迦と弥勒を組み合わせた表現形式も行なわれ、初期には釈迦牟尼ブツダの立像、坐像の台座に弥勒菩薩像を付加する作例が多かった。ガンダーラ美術の後期になると、坐仏の頭上に弥勒菩薩を配置する例が出現する。その場合、坐仏は蓮池から生じる大きな蓮華の上に坐して説法するという神秘的表現となる。同時に歴史上の人物として

のブツを讃える仏伝図とは性格が異なる。そこにもブツ観の変化、つまり歴史上の人物から永遠的存在の仏への変化がうかがえる。ガンダーラ美術の例としてモハマッド・ナリー出土の浮彫を例示しよう(挿図8)。浮彫中央に蓮華座に坐して説法するブツが大きく描かれ、周囲には説法を聴聞する人々の姿がある。上段、半円形の中には水瓶・束髪型の弥勒菩薩が交脚の姿勢で坐り、周囲の人々から賛嘆されている情景が描れる。下段には仏鉢が中央に描かれ、人々の供養を受けている。パーミアン坐仏の坐仏と天井弥勒菩薩像もこのようなガンダーラ美術後期の浮彫を継承したものと見える。ただ、パーミアンの場合、ブツ像は石芯しか残存せず(E、H窟)蓮華台座に坐る姿であったかどうかは確認できない。



挿図8 ガンダーラ浮彫 ムハマッド・ナリー出土
85 cm × 47 cm, Chandigarh Museum

弥勒信仰がクシャン時代ガンダーラでとくに流行したことは、さきに述べるとおり、造形美術のなかに多くの弥勒菩薩の礼拝像が残されていることによって確かめられる。そして当時の弥勒信仰に関する經典類も多く制作された。現在、サンスクリット原典はほとんど逸失し、現存する種々の漢訳經典を通してそれらの内容をうかがい知ることができる。鳩摩羅什訳『弥勒大成仏經』(大正14、No 456)、同訳『弥勒下生成仏經』(大正14、No 454)のほか、『増一阿含經』卷44(大正2、No 125, pp. 787 c - 789 c)、『長阿含經』卷6 轉輪聖王修行經(大正1、No 1, pp 39 a - 42 b)、『中阿含經』卷13 説本經(大正1、No 26, 508 c - 511 c)など、大小乘經典を問わず、弥勒信仰が取り込まれている。しかし弥勒信仰が仏教思想の中にいつ、どのようにして発生したかについての正確なことは不明である。仏教思想の独自の発展かゾロアストラ教などの外来宗教との混淆から生じたのか、見解が種々わかれている⁷⁾。ここではその問題に立ち入らないで、弥勒信仰の原型に近い經典とみなされている東晋失訳『弥勒来时經』(大正14、No 457, pp 434 - 435)をとりあげ、パーミアン石窟の弥勒信仰との関わりを考えてみたい。まず、以下に『弥勒来时經』の翻訳を示す。

シャーリプトラはブッダの弟子のなかの第一人者であった。慈愛の心で天下を念じ、ブッダのもとに赴き、前にすすみ長跪叉手して申しあげた。「ブッダよ、あなたはかつて自分の亡き後には、弥勒仏が到来するであろうといわれた。今、どうかその説明をお聞かせいただきたい」と。そこでブッダは次のように答えられた。

「弥勒仏の到来以前、ジャンブドヴィーバ（現在の世界）の山樹草木はみな焼け焦げ、今にいたって世界の大地は周囲六十万里となる。しかし弥勒仏が出現する時には、ジャンブドヴィーバの大地は東西長さ四十万里、南北広さ三十二万里となり、いたるところに五種の果実がみえる。四方海内の陸地は山稜も溪谷もなく、まるで砥石のように平坦となる。樹木もすべて長大となる。その時、人びとには貪淫、瞋恚、愚癡の者なく、人口が増大して、集落、家屋が密集し、隣の集落からニワトリの鳴声が聞こえてくる。人の寿命は八万四千歳であり、女性は五百歳になって嫁ぐ。人びとは病気の苦しみがなく、世界に充満する。ただ、人には三つの煩いがある。一つは生理的要求、二つは飲食、三つは老衰である。人びとの顔色はみな桃華色で、お互いに尊重しあう。

その時、ケートウマティー（鶏頭末）という国があり、国王が統治し、都城の周囲は四百八十里あり、土で築き、板で覆う。さらにその上を金銀、瑠璃、水晶、珍宝で飾る。城壁四面にはそれぞれ十二門があり、城門は美しく彫刻が施され、くわえて金銀、瑠璃、水晶、珍宝で飾られる。国王の名はシャンカ（僧羅）といい、四方海内はみなシャンカ王に服属する。国王が外出する時には、空を飛行する。どこへ行こうと、人民、鬼神は皆なびき従う。国には四つの宝物がある。第一は金であり、龍がこれを守護する。龍名はエーラーパトラといい、金の守神である。その龍神の住処はガンダーラ（犍陀）という。第二は銀であり、その国内にこれを守護する龍があり、その名をパーンドウカ（幡頭）という。第三は明月珠であり、産出する土地はスラト（須漸）、その珍宝を守護する龍をピンガラ（寶竭）という。第四は瑠璃であり、産出する国をパーラーナシー（汜羅那夷）という。

さて、その国にスブラフマン（須凡）というひとりのバラモンがあり、弥勒の父親となる人である。弥勒の母はマハーヴァティー（摩訶越題）といい、弥勒はこの二人を両親として生まれる。弥勒のカースト（種）はバラモンであり、身体には三十二相八十種好がそなわり、身長は十六丈。弥勒がこの国に誕生するや、その視力は万里を見通し、頭から放射する光は四千里を照らす。弥勒が得道しブッダとなる時には、龍華樹の下に坐す。樹の高さは四十里、広がりもまた四十里。弥勒がブッダのさとりを得る時、八万四千人のバラモンが皆弥勒のもとに赴いて師事し、出家して沙門となる。弥勒が龍華樹の下に坐し、さとりを得るのは、四月八日、明星が出現する時である。国王シャンカは弥勒がブッダとなったことを聞くと、八十四人の王を率い、一緒に弥勒仏のもとに赴く。かれらは皆国を棄て、王位を捐て、それを太子に譲ってやってくる。みな除鬚、剃髪して沙門となる。弥勒の父母もその中にある。さらに聖バラモンた

ち千八十四人も皆弥勒仏のもとに赴いて沙門となる。この国に大富豪で、賢者のスダナ(須檀)あるいはスダッタ(須達) 人民とも呼ばれる者がおり [シャーキャムニ仏当時の給孤独長者] 黄金を持参して弥勒仏と沙門たちに献上する。評判は日に日に遠方に広まり、スダッタは再び賢善者たち一万四千人を率いて弥勒仏のところへ赴き、沙門とさせる。(中略)

弥勒仏は坐して、比丘僧、比丘尼たちのために次のように説法するだろう。『あなたがたは皆、シャーキャムニ・ブツダ(釈迦文仏)の時世に、誦経を怠らず、慈しみの心を持ち、布施をおこない、瞋恚せず、あるいは寺塔を建立し、仏舍利を塔内に安置し、焼香、灯明をともし、絹幡を懸け、散華し、読経供養した者である。ここにいる比丘尼たちは、皆シャーキャムニ・ブツダの時世に戒律を保持し、至誠であった人たちであり、今皆ここに来て弥勒仏の説法を聞く。ここにいる比丘たちは [釈迦仏の] 教えをよく保持した人たちであり、皆龍華樹の下で得道するであろう。』

弥勒仏の第一回の説法会では、九十六億人が皆阿羅漢の境地に達する。第二回の説法会では、九十四億人が皆阿羅漢の境地に達する。第三回の説法会では、九十二億の沙門が皆阿羅漢の境地に達する。天上界のすべての諸天が華を手を持ち、弥勒の上に散華し、弥勒仏は阿羅漢たちを率いて、ケートゥマティー王城に入る。国王はじめ皆のものは宮殿内で食事を施す。城内は明るく、夜もまるで昼のように明るく輝く。弥勒は宮殿のなかで坐して、次のように説く。『善は為さざるべからず。道は学ばざるべからず。経は讀えざるべからず』と。」

以上のようにシャーキャムニ・ブツダが説きおわると、諸比丘および国王、百官は皆ブツダの教えを護持して解脱を得た。弥勒仏は今より後、六十億と六十万年目に到来することになる。

弥勒仏の到来は今から 60 億年あまり後の世ということで気の遠くなるような話である。弥勒はシャンカという王の統治するケートゥマティー国において、あるバラモンの家庭に生まれる。その時は五濁悪世の現世と違って、人々の間に争いはなく、病気もなく、なんの苦しみのない理想的社会が実現している。弥勒は生れながらにして身体に三十二相八十種好の特徴が備わっているというのは、釈迦牟尼仏と同じである。しかし弥勒仏の身長は「丈六」といわれた釈迦仏の十倍の十六丈であるという。この經典中には言及されていないが、他の弥勒經典では人々の背丈も伸び、同じく十倍(80尺)になっている。背丈だけでなく人々の寿命も釈迦仏時代(現世)の100歳から84,000歳になるという。陸地には険しい谷もなく、高い山もなく、平坦な土地が一面に続く。

ユダヤ教やキリスト教の救世主メシアは人々を苦しみの窮地から救済し、理想世界を出現すると信じられるが、仏教の弥勒(マイトレーヤ)は人々が努力して理想社会を作り上げた時にはじめて出現し、釈迦仏の救済に漏れた人々をさとりに導くという内容である。その点では、光明の善神と暗黒の悪神の長い闘争の最後に登場し、善神(アフラマズダ)を助けて理想世界

を実現するというゾロアストラ教の救世主サオシュヤントにいくぶん近いかも知れない。

さてパーミアーン石窟と弥勒信仰との関係は、ただパーミアーン壁画に弥勒菩薩像が多く描かれているというのみならず、巨仏思想を共通に持つという点にある。西暦 630 年頃にパーミアーンを訪れた玄奘三蔵は地元の学僧に案内されて聖地を参拝した。そして「王城東北の山際に高さ百五十尺の立石像があり、その東に伽藍があり、さらにその東に高さ一百尺の鑰石釈迦立像がある」と当時のパーミアーンの情景を述べる。その二大石仏は現在の 55 m の西大仏と 38 m の東大仏に他ならない（残念ながら 2001 年 3 月爆破、消失）。

巨大な仏像を建立するにいたる背景は定かではないが、偉大な釈迦仏（シャーキャムニ・ブツダ）を限りなく大きく表現したいという欲求は、仏像の発生の当初からうかがえた。しかしガンダーラ美術のように石材に彫刻するのであれば、等身大かそれを少し越える大きさが限界であった。しかしやがて石彫にかわってストゥッコ塑像で仏像を制作するようになると、高さ数メートルに及ぶ大像がつくれ、壁面にそわせて安置することが行なわれた（タフティ・パヒ遺跡の例）。またインド本土の石窟寺院のように、岩山にじかに仏像を彫刻するようになると、限りなく大きな仏像をつくることも可能となる。

西暦 400 年頃、インド巡礼をめざした法顕はガンダーラに入る手前、インダス河上流のダレル（陀歴国）の峡谷において、高さ 8 丈の大きな木彫弥勒菩薩像を目撃した。土地の人々の伝えによると、昔、その国に神通力を獲得した羅漢がおり、一人の工匠をつれて弥勒菩薩のいるトゥシタ天に三度昇り、弥勒の大きさ、容貌を詳しく観察し、地上にそれとそっくりの弥勒像を作らせたという。もしそれが交脚あるいは坐像であるとすれば、高さも 16 丈の半分の 8 丈でよく、弥勒経典とよく符合する。

パーミアーンの二大石仏も背丈 16 丈ほどの大仏をめざしたものであろう。しかしブツダとしての弥勒はまだどこにも存在しない。玄奘が東の 38 m 大仏を「釈迦立像」と記したように、それはあくまでもシャーキャムニ・ブツダ像の拡大であった。弥勒自身は菩薩の姿で石窟天井壁画に描かれていた。そこには偉大なるブツダを限りなく大きく表現し、賛嘆したいという欲求と、弥勒仏の到来を熱烈に待ちわびる気持ちの双方が込められていたのではないだろうか。

VI 結び

パーミアーン石窟と二大石仏がいつ、誰によって、何の目的で造営されたか、上述した内容をまとめてみたい。まず、ガンダーラ様式にインド・グプタ様式が加わった二大石仏のスタイル、壁画唐草文様の古典的スタイル、礼仏行列像のササン式王冠などから、パーミアーン大仏は西暦 400 年頃に造立されたと考える。その頃キダーラ・クシャン王がかつてのクシャン帝国の復興をめざし、ヒンドゥクシュの南北世界を再統一した。そのキダーラ・クシャン王が仏

教と国家の繁栄を祈願してパーミアーンの大仏、石窟を造営したものであり、かれら王族の姿は 38 m 大仏の天井壁画に礼仏行列図の形で描き留められたと推論する⁸⁾。

ではなぜパーミアーン峡谷が選ばれたのか。パーミアーン峡谷は内陸の高地にあり、気候は寒烈で、けっして肥沃な土地ではない。峡谷の北斜面に大仏を彫出するのに格好の断崖が存在したことも、選ばれた条件のひとつであったかもしれない。しかしなぜ前例のない大きな仏像の造立が必要であったか。

今は亡きブツダの悲しみに耐えかねていた仏教徒にとって、将来に弥勒仏が登場するという思想はとても魅力的であった。民衆ばかりでなく、高僧まで将来仏の弥勒に心惹かれて、本来の仏教精神を忘れるほどであった。弥勒仏が出現する時、この世は戦争のない平和な世界である。人々は長寿を享受するばかりでなく、弥勒仏と同様に身長が巨大化するという。巨人の目からすれば、現在の険しい山谷も平地に等しくなる。

パーミアーン大仏の発願者は峡谷の北斜面に弥勒仏に相当する大きな仏像を建立した。弥勒到来時のユートピア世界を演出しようとしたのではないだろうか。澄み切った青空を背景に、標高 2,500 m のパーミアーン峡谷は夏なおさわやかである。シルクロードの幹線に近いとはいえ、支流の峡谷であり、けっして喧騒の世界ではない。出家者たちが修行する閑静な環境がそこにあった。パーミアーン峡谷は、今もそこを訪れる人に世俗を忘れさせる清浄な雰囲気がある。それは峡谷の美しい景観とそれにとけこんだ二大石仏、坐仏仏龕と無数の石窟の遺跡である。平和な世界と弥勒の到来を夢見た遥か昔の人々の気持ちが伝わってくる。しかし近年のパーミアーン、そしてアフガニスタンをとりまく世界情勢はそれとは逆の方向に向かっている。いつになったら人々は悔い改めて、平和な世界をめざして歩みはじめるのだろうか。

注

- 1) インド隊によるパーミアーン大仏の修復概要については、R. Sengupta, Restoration of the Bamiyan Buddhas. in Klimburg-Salter, D. 1989 : 202 - 205 , Appendix III .
- 2) 小谷仲男「パーミアーン大仏破壊の背景」『中外日報』2001年3月15日, pp.1-2.
- 3) 「飾られたブツダ」について。僧衣の上に三叉状のケープをはおり、鳥翼、三日月、球形からなる宝冠をつける。両肩からリボンが翻る。もし僧衣、蓮華座、手に仏鉢がなければ、王像と同じである。この宝冠、ケープをつけたブツダの性格、教義については不明であり、Le Bouddha paré (飾られたブツダ) と名付けられて、今日にいたっている (宮治昭 1981 : 11 - 34 参照)。
- 4) 小谷仲男「ドゥルマン・テベ第二次発掘」『東方学報』第37冊、1966, pp.370 - 381、および関連する同「チャナカ・デーリ第四次、第五次発掘」『東方学報』第37冊 1966, pp.411 - 423 を参照されたい。
- 5) 西川幸治編『ラニガト』図版篇、京都大学学術出版会 1994, pl.172 - 6, pl.182 - 16, pl.188 - 15~20, 25, pl.189 - 35~7.
- 6) 水野清一、長広敏雄『雲岡石窟』第4巻(第七洞本文)、p.9, 図20; 同書第5巻(第八洞本文)

p 35, 図 14; 同書第 6 卷(第九洞本文) p 49, 図 28.

- 7) A. Sponberg and H. Hardacre ed., *Maitreya, the Future Buddha*. Cambridge University Press 1988 が弥勒信仰についての最近の論文集であり、最初の二、三章が弥勒思想の起源に言及する。「ガンダーラの瑜伽師と弥勒信仰」(小谷仲男 1996: 228 - 255) 注 1 を参照されたい。またガンダーラ弥勒信仰と中国末法思想の関係については文献の小谷仲男 1996 b: 118 - 124 にふれたことがある。
- 8) 最近、パーミアン石窟から一万点余の仏典写本(貝葉、樺皮)が発見され、内戦のアフガニスタンから外国の市場に流出し(1995 年以後) 大部分がノルウェーの実業家スコイエン氏のコレクションに帰した。その写本についての最初の調査報告書が引用文献に挙げた Braarvig, J. ed. 2000. である。写本には西暦 2 世紀から 8 世紀のものが含まれるという。それらがパーミアン石窟寺院の活動年代やパーミアンの仏教信仰にどのような示唆を与えてくれるだろうか。研究の進展が待たれる。日本から研究に参加している仏教大学松田和信教授の報告文(松田和信 2001: 21 - 24) を参照されたい。

引用文献

- Bivar, A.D.H. 1998. The Sasanian Princes at Bamiyan. in V.S. Curtis ed. *The Art and Archaeology of Ancient Persia: New Light on the Parthians and Sasanian Empires*. London. pp 103 - 110.
- Braarvig, J. ed. 2000. *Buddhist Manuscripts (Manuscripts in the Schoyen Collection I)*. Oslo.
- Curiel, R. 1953. Le trésors du Tépé Maranjan. in R. Curiel et R. Schlumberger, *Trésors Monétaires d'Afghanistan. Mémoires de la Délégation Archéologique française en Afghanistan* [以下略号 MDAFA] Tome XIV, Paris. pp. 101 - 132, pls IX - XVI.
- Ghirshmann, R. 1948. *Les Chionites - Hephtalites*. MDAFA XIII, Le Caire.
- Göbl, R. 1967. *Dokumente zur Geschichite der iranischen Hunnen in Baktrien und Indien*. 4 vols. Wiesbaden.
- Göbl, R. 1977. *Sasanian Numismatics*. Wurgburg.
- Hackin, J. 1928. *Les antiquités bouddhiques de Bāmiyān*. MDAFA II, Paris.
- Hackin, J. 1933. *Nouvelles recherches archéologiques à Bāmiyān*. MDAFA III, Paris.
- Hackin, J., Carl, J. et Meunie, J. 1959. *Diverses recherches archéologiques en Afghanistan (1933 - 1940)*. MDAFA VIII, Paris.
- Klimburg-Salter, D. 1989. *The Kingdom of Bamiyan. Buddhist Art and Culture of the Hindu Kush*. Naples - Rome.
- Lévi, S. 1932. Notes sur manuscrits provenant de Bāmiyān (Afghanistan) et de Gilgit (Cachemire). *Journal Asiatique* 1932, pp 1 - 45.
- Martin, M.F.C. 1937. Coins of Kidara and the little Kushans. *Journal of Royal Asiatic Society, Bengal*. Vol III, pp 23 - 49, pls 1 - 5.
- Rosenfield, M.J. 1967. *The Dynastic Arts of the Kushans*. California.
- Rowland, B. 1961. The bejewelled Buddha in Afghanistan. *Artibus Asiae* XXIV, pp 20 - 24.
- Rowland, B. 1971. The Wall Paintings of Bamiyan. *Marg* XXIV, pp 25 - 43.
- Tarzi, Z. 1977. *L'architecture et le décor rupestre des grottes de Bāmiyān*. Paris.
- 内田吟風 1972. 「吐火羅国史考」『東方学会創立二十五周年記念東方学論集』.
- 内田吟風編 1980. 『中国正史西域伝の訳註』 龍谷大学文学部.

パーミアン石窟と弥勒信仰

- 榎一雄 1958.「キダーラ王朝の年代について」『東洋学報』41-3(『榎一雄著作集』第一巻、中央アジア史Ⅰ、汲古書院 1992、pp 360-412)。
- 小谷仲男 1971.「仏教美術の東方伝播」山田信夫編『ペルシアと唐』(東西文明の交流2)平凡社、pp 53-113(小谷仲男 1996 a:309-375 所収)。
- 小谷仲男 1994.「ガンダーラの瑜伽師と弥勒信仰」『富山大学人文学部紀要』第20号、pp 1-21(小谷仲男 1996 a:228-255 所収)。
- 小谷仲男 1996 a.『ガンダーラ美術とクシャン王朝』(東洋史研究叢刊51)同朋舎出版(京都大学学術出版会)。
- 小谷仲男 1996 b.「ガンダーラ弥勒信仰と隋唐の末法思想」気賀沢保規編『中国仏教石経の研究』京都大学学術出版会、pp 108-131。
- 小寺武久、前田耕作、宮治昭 1971.『パーミアン-1969年度の調査-』名古屋大学。
- 高田 修 1971.『アジャンタ』平凡社。
- 高田 修 2000.『アジャンタ壁画』日本放送出版協会。
- 田辺勝美 1999.『毘沙門天像の誕生-シルクロードの東西文化交流』吉川弘文館。
- 西川幸治編 1994.『ラニガト-ガンダーラ仏教遺跡の総合調査1983-1992』(第二冊図版篇)京都大学学術出版会。
- 樋口隆康編 1983-84.『パーミアン-アフガニスタンにおける仏教石窟寺院の美術考古学的調査1970-1978年』4巻、同朋舎出版。
- 松田和信 2001.「パーミアン渓谷から現れた仏教写本-スコイエン・コレクション第1巻出版をめぐって-」『仏教大学総合研究所報』No.19、pp 21-24。
- 松田寿男 1986.「寄多羅月氏に就いての考」(原著 1937)『松田寿男著作集』Ⅰ、六興出版、pp 283-313。
- 水野清一 1961.「パーミアン石窟覚書」塚本博士頌寿記念会『仏教史学論集』pp 760-63。
- 水野清一編 1968.『ドゥルマン・テベとラルマ-アフガニスタンにおける仏教遺跡の調査1963-1965』京都大学。
- 水野清一、長広敏雄 1951-56.『雲岡石窟』16巻32冊、京都大学人文科学研究所。
- 水野清一、樋口隆康編 1978.『タレリ：ガンダーラ仏教寺院址の発掘報告1963-1967』同朋舎。
- 宮治昭 1976.「パーミアン西大仏(五十五米仏)の仏龕壁画」『国華』992号、pp 1-49。
- 宮治昭 1977、78.「パーミアン壁画の展開」(上、下)『仏教芸術』113号、pp 3-27、118号、pp 13-47。
- 宮治昭 1981.「パーミアンの飾られた仏陀の系譜とその年代」『仏教芸術』137号、pp 11-34。
- 宮治昭 1983.「パーミアンの塑造唐草紋」樋口隆康他『展望アジアの考古学』新潮社、pp 575-588。
- 宮治昭 1984.「パーミアンの仏教世界」弘前大学哲学会『哲学会誌』XIX、pp 1-21。
- 吉川逸治 1948.「パーミアンの芸術」『中国及び西域の美術』白鳳書院、pp 71-109。
- [唐] 慧立・彦棕著『大慈恩寺三蔵法師伝』北京、中華書局 1983。
- [東晋] 法顕著『法顕伝校注』上海、古籍出版 1985。
- [唐] 慧超著、張毅箋釈『往五天竺国伝箋釈』北京、中華書局 1994。
- 大正新脩大蔵経……大正(略号)

The Colossal Buddhas and Maitreya Cult in Bamiyan

ODANI, Nakao

The date of the colossal Buddhas at Bamiyan is still controversial, ranging between 2nd and 7th century. Dr. Z. Tarzi has proposed the comparatively late date. His first inquiry was who were the crowned figures painted within the niche of the 38 m Buddha (Figs. 1, 2). There one could see a pious procession of royal families, headed by a monk toward the Buddha. Dr. Tarzi compared their crowns with those of Sasanian kings and local princes, which were represented on the coins issued by them. The crowns of the wall painting at Bamiyan were designed by such elements as merlon, crescent, pair of ribbons, a globe and so on. Dr. Tarzi has made two suggestions; they are to be identified either with the crowns of Kidara Kushans (ca 400 A.D., Figs. 3, 4) or with that of an Indo-Hephthalite king, Narana-Narendra (ca 580 A.D.) (Tarzi 1977 : 122).

Dr. Tarzi's second inquiry was the scrolls which decorated the arch shaped or trapezoid niches modeled on the walls of Bamiyan caves. Inside each niche, an image of Buddha or Bodhisattva in mold had been enshrined. The typical scroll ornaments could be seen in the caves dug at the feet of the 55 m Buddha. They were all undulating volute, rich scrolls (Fig. 5 - 1, 2). Dr. Tarzi pointed out that such type of scrolls would be influenced from Indian art in later Gupta and post-Gupta period, as one can see them in the Ajanta Cave No. 2. The same type of scrolls were also found on the Buddhist niches of Fondukistan in Afghanistan, dated late 7th century by the Arab - Sasanian coins found there. As a result, Dr. Tarzi chose the later date of the colossal Buddhas and he identified the crowned figures in the royal procession with a Hephthalite king of Zabulistan and a Turkic king of Qunduz who might have ruled Bamiyan at that time (Tarzi 1977 : 125 - 9).

However, I have recently noticed another type of scrolls extant on the wall paintings of the 55 m Buddha. The contour lines nearly faded away and so its significance has been overlooked. I managed to trace a part of them (Fig. 5 - 3). It is a vine scroll with leaves in the loops, being classical in style, derived from Gandhara Art. It is this scroll that was contemporary with the construction of the colossal Buddhas. The modeling scrolls discussed above might be later works or additional decorations at the time of restoration of the caves. Therefore the colossal Buddhas at Bamiyan should have been constructed more early than Dr. Tarzi and others have guessed and the crowned princes represented in the wall painting must be identified as a Kidara Kushan king and his family. Taking these factors into consideration, we can date the colossal Buddhas and the wall paintings in the niches to be ca 400 A.D., when the cult of Maitreya, the Buddha in future, was most prevailing in Gandhara and Central Asia.